脱・成長主義！

佐伯啓思さんが 文化心理学者 内田 由紀子さん と語る ㊤

幸福とはどんな状態でしょう。その定義、感覚は一様ではなく、国や時代、もちろん個人によってもまちまちです。経済成長期の社会と成熟期を迎えた社会とでは幸せの感じ方も大きく変わり、時の政治やメディアの影響もありそうです。今回は、幸福感と文化の関係について研究する文化心理学者で京都大こころの未来研究センター准教授の内田由紀子さんと、思想家で京都大名誉教授の佐伯啓思さんが語り合いました。

（構成・道又隆弘）

うちだ・ゆきこ　1975年兵庫県生まれ。2003年京都大人間・環境学研究科博士課程修了。米スタンフォード大客員研究員などを経て、08年から京大こころの未来研究センター助教、11年から現職。10～13年、内閣府「幸福度に関する研究会」委員。著書に「農をつなぐ仕事」「『ひきこもり』考」（いずれも共著）など。

日米で異なる「幸福」定義 × 経済理論の借用なじまず

佐伯　文化心理学という言葉は一般にはなじみがないですが、簡単に言うとどういう研究なんですか。

内田　文化や社会がどのような影響を心に及ぼすか、または、心がどのようにして文化や社会を作り上げるか、その関係を解明することが中心です。

高校生の頃は平家物語や今昔物語などの古典が好きだったんですが、大学に入ると、文学そのものより、物語から昔の人の心の働き、感情の揺れが垣間見えることに興味をそそられた。源氏物語だと嫉妬心とか。それで、時代や文化と「こころ」の関係性を知りたくなり、近年は主に、国や文化によって幸福を求めるあり方がどう違うのかという点について研究しています。

佐伯　学問はユニバーサル（普遍的）なものという考えが強いですが、人間の心理は社会的、文化的特性と密接に関係しています。だから、社会についての普遍的な学問は本当に難しい。

例えば、日本の経済学は基本的にアメリカの経済学で、その市場経済理論が目指すのは個人の主観的な効用となっている。個人主義から出発し、能力主義、競争主義であり、自由主義です。こうしたアメリカ的価値観を反映した経済学を日本人がやって、本当にうまくいくのか、というのは大いに疑問です。経済活動が目指すのは、人間の幸福を最大化することだとしても、そもそも何が幸福かという考えは日米間で随分違う。経済理論は抽象的だから、それ自体は日本でも通用しそうに見えるが、実際に社会や人間に適用するとうまくいかないと思いました。

「成功」に不安感

内田　佐伯先生の「反・幸福論」という本を拝読して、まさに「わが意を得たり」という感想を持ちました。社会心理学でも、幸福とは何かという定義からしてアメリカの教科書から引用されています。人生の目的とは自己実現であり、幸せな人のイメージは、目標を達成し、生きがいがあって、収入も良いという、いわゆる「成功者」です。でも日本人には違和感がありますよね。今どきの学生たちも違和感を示す。そんなに成功している人は、そのうち頭を打つだろうとか、これまでにものすごい苦労をしたにちがいないという、負の側面を意識した反応が出てくる。

佐伯　頑張って富を得るというのがアメリカ的な精神の一つ。努力すれば人間は向上する。そうならないのは頑張りが足りないからだと。

内田　特にプロテスタントの人は、自分は神に選ばれたから、今ここにいる。そのことを「成功」により証明すべきだ、という気持ちが根底にある。日本人にはなじみにくい感覚かもしれません。

心理学で、あなたはこの中からどれに当てはまりますかと、点数で表してもらう測定法があります。アメリカで作られた質問を日本語に訳して使ったら、全然反応が違います。アメリカだと20歳ぐらいの学生が「私は望んだものは全て手に入れてきた」とかの項目に高い点数をつける。京大生だと「自分の人生はこれからなので、まだ何も手に入れていない」と答える学生が多い。アメリカ人は、手に入れたストックを投資して会社を興すとか、さらなる豊かさを目指すという発想。幸福とは、結果であると同時に機会拡大の原動力、燃料タンクに搭載されたエンジンだと考える。

日本の幸福はそうではなく、人生という「箱」から玉を取り出すと、たまたま白玉が出てきたという感覚。箱の中には白玉と黒玉が同じほどあって、白玉ばかり取り続けると、黒が多く残っているのでは、と不安に思う。アメリカ的幸福感は資本主義経済とも密接な関係にありますが、日本ではあまりリンクしない。

佐伯　日本人は、こういう人間になりたい、社会でこういう役割を果たしたいという意識は弱いですね。どちらがいいという話ではないが、とりわけ欧米では、こんな人間になりたい、起業したい、弁護士になりたいと目標がかなりハッキリしている。社会的な価値観の違いかな。アメリカだと、成功しないといけない、社会に貢献しないといけない、という一種の道徳的価値観が子どもの頃から植え付けられる。日本では、自分らしい生き方ができればいい、となる。

内田　アメリカで驚いたのは、若者たちの社会に対する責任意識の強さ。特にエリート学生は、自分は大学という社会リソース（資源）を使っているから社会に還元しなくては、という思いがある。それは、自分の才能を発揮して成功することが社会を良くすることになるという自負心でもある。

幸福を感じる源泉を支えているものは何かを語り合う佐伯さんと内田さん（京都市左京区・京都大こころの未来研究センター）＝撮影・熊谷修

「成功」は社会貢献

親が子に期待することを尋ねた国際比較調査で、ほとんどの国が責任感とか社会貢献を挙げたが、日本は「人に迷惑をかけない」や「人に好かれる」が多かった。自己実現してほしいと言う親はあまり多くない。

佐伯　面白いですね。アメリカ人は個人的な成功への欲求が強いと言ったが、少し深く掘ると、上質な部分では、その成功を社会への貢献と考え、社会的還元に価値を置くところもある。

内田　経済的に余裕があれば進んで寄付をする文化に表れてます。特に、成功者は驚くほど多額の寄付を当たり前のようにしている。

佐伯　（ドイツの社会学者）ウェーバーの説になるが、なにか良いものを作り出して、商品化すれば、大勢の人が喜ぶ。その結果、自分にもお金が入ってきて、個人的な成功になるという考えが基本にあるのかも。

内田　（双方が得をする）「ウイン・ウイン」の関係ということですね。ある種の幻想だけど、一部の人は実現することができる。

佐伯　日本人は極端な貧富の差を良しとせず、皆がほどほどの幸せを目指せるよう社会の仕組みを作ってきた。だから、ある程度の所得の増加は期待するけど、アメリカの経営者のように年収10億円と聞くと「何に使うんだ」と思ってしまう。でも、それを20億円に増やしたいと思うのがアメリカ的。これほど幸福に対する捉え方が違うと経済そのものの考え方も違うはずだが、構造改革のように日米で同じようなシステムにしようとするからさまざまな問題が起きるのです。

内田　アメリカ型へのシフトが本当に幸せにつながったのか、私たちが幸福を感じる源泉を支えているものは何かを、今ひとたび検討することが大切ですね。

佐伯さんの深掘りコラム

たまたまでそこそこ幸せ

個人の幸福追求の権利は、近代社会のもっとも重要な原則のひとつである。アメリカの独立宣言にも幸福追求の権利が高々と謳われ、日本国憲法でも、生命、自由と並んで幸福追求の権利が唱えられている。

しかし、問題は「幸福」の中身であり、この言葉で何を意味しているかだろう。もともと英語の「ハッピネス（幸福）」は、「ハップ」を語源としており、これは「偶然」の意である。つまり、幸福は、たまたま生まれがよかったり、運がよかったり、偶然が味方してくれて手に入るものだと思われていたのだろう。それが、近代社会では、しかもとりわけ個人の能力や努力を重視する西洋社会では、幸福は自分の手でつかみ取るものである、ということになった。

しかし、日本人の幸福感は少し違っているのではなかろうか。「たまたまよい友に恵まれ、たまたまよい同僚が支えてくれたおかげで自分は幸福だった」などとわれわれはよくいう。この「たまたま」が大事であって、「たまたま」に感謝するといった思考が日本人には強いのではなかろうか。だから、内田さんも指摘しているように、一時的にあまりに幸福であり過ぎると、われわれは「運を使い果たす」と感じて、逆に将来の不安に駆られるのである。周りの人と助け合い、また同調しながら、そこの幸福を維持する、というのが日本人の幸福感なのであろう。それはGDPや成長率で示されるものではない。だとすれば、アメリカ型（西洋近代型）の幸福を追求しだしたところに、日本人の「不幸」があるのかもしれない。

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます